

ほんのたまごミニコミ紙

miniたま (みにたま)

2020. 8 第115号

この記事をどう読めばいいでしょうか。2020年8月20日付の読売新聞首都圏版朝刊の第1面です。「コロナ『第2波のただ中』 感染症学会理事長が見解」という見出しが躍っていました。記事はだいた次のような内容です。8月19日に都内で開かれた日本感染症学会の学術講演会の冒頭あいさつで、同学会の館田一博理事長が「新型コロナウイルスの感染状況は、まさに今、『第2波』の真っただ中にある」という見解を示した、というのです。死者は第1波よりも少なく、ピークを越えたかのように見えるが、「再上昇しないのか注意して見ていかねばならない」と。

気になるのは、その館田氏の見解を踏まえながら、記者会見で西村康稔経済再生相が、こう答えたことです。「第2波について政府として定義を決めているわけではない」。これはちよっと信じがたい発言です。政府は感染症学会に専門家としての意見をうかがう立場でしょう。その専門家がまさに第2波である、と語っているわけです。であれば、その見解をただちに検討して、国民に対策を明確にすべきである、それが政府の急務ではないでしょうか。何しろ西村氏は「新規陽性者数だけ見れば緊急事態宣言の時よりも多いので、大きな波であることは間違いない」と感染拡大を認めているのです。第2波でないとすれば、その大きな波は果たして何なのでしょう。

いつ収束するか、全く先の見えないコロナ禍の中で、国民は不安に陥っています。政府には、一刻も早い対応をお願いしたく思います。

今が旬なこの1冊⑦

片岡喜彦著「古本屋の四季」 皓星社 2020年7月刊

定年後の2009年に古書片岡を開店して10年が経った。その歳月を地道につづったエッセー集。いわく「番台から眺めてきた、本と人と心の光景」。古書店主が書いた類書は数多くあるが、「番台から」の言葉通り、肩肘張らない著者の人となり、文章の端々からにじみ出た1冊である。

実は著者とはお会いしたことがある。2019年夏、神戸に知人の古書店主3人と旅行した際、古書片岡に立ち寄った。ご本人が応対してくれ、店舗前に並んで全員で記念撮影をさせてもらった。気さくにフレームに納まる姿に、温かな人柄がうかがえた。

意外なのは、店の棚に労働運動、社会経済、思想の本が多いこと。若手店主の店に多いサブカルチャー系が見られない。本書でも触れられているが、筆者は労働者運動の専従職を35年、務めていた。つまり自分が信念を持って、ぶれずに選んだ本だけを、棚に並べている。

「あなたが付けた値に自信を持ちなさい」と諭す客がいる。保育社のカラーボックスの収集家がやってくる。売り上げゼロの日もある。まさに千客万来。それを番台から眺める筆者がいる。

評論家の川本三郎氏が、週刊誌の書評で本書を激賞している。「著者は本好きであると同時に人間好き。客との会話を楽しむ」と。信念のある著作と著者しか取り上げない川本氏が認めている。それだけで本書の素晴らしさが分かるだろう。(K)

発行 ほんのたまご

メールアドレス nasuka@hontama.com

著作権は放棄していません

本紙に掲載されている画像・文章の

無断転載を禁止します



古本屋の四季

片岡喜彦

定年ののち、古書片岡を開いて10年。
番台から眺めてきた、本と人と心の光景。

皓星社

たまたま本の話

第115回「蜘蛛の糸」が絡む話

芥川龍之介・小松左京・つげ義春

つげ義春が書いた「リアリズムの宿」(1973年11月、「漫画ストーリー」掲載)は、早とちりして別の宿屋に泊まって、「あちらの宿屋に泊まっておけば」と主人公が悔やむという話だ。ペーソス漂う傑作である。

この漫画のラストに、宿屋の子供が夜、本を朗読するシーンがある。隣の部屋から主人公の耳に、子供の声が聞こえてくる。「お釈迦様は極楽の蓮池のふちに立って、この一部始終をじっと見ていらっしました」「自分ばかり地獄から抜け出そうとする、犍陀多(カンダタ)の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて」……。言うまでもなく、これは芥川龍之介の「蜘蛛の糸」(1918年5月、「赤い鳥」掲載)の一節である。

この場面になぜ「蜘蛛の糸」が出てくるのか、以前からよく分らなかった。他人に対して慈悲の心を持たない者は罰せられる——。芥川の著名な童話の教訓が、この場面に相応しいのかどうか。主人公はカンダタのような罪人ではない。宿屋の家族も蜘蛛の糸にぶら下がる地獄の亡者たちではない。

実は芥川の「蜘蛛の糸」には原典があることを最近、知った。ドイツ生まれのアメリカ作家で、宗教学者でもあるポール・ケーラスが1894年に書いた仏教説話集「カルマ」がそれである。日本の仏教学者の鈴木大拙が、1898年に「因果の小车」というタイトルで日本語に訳しているから、芥川がこれを読んでいたことは確実だろう。そして大正でいえば7年に「蜘蛛の糸」を書いたとき、この説話を換骨奪胎したのである。

ポール・ケーラスの原作にあって、芥川が削除した部分がある。それをざっと要約してみる。慈悲深い僧侶

が、極悪人に諭すときの例え話として、カンダタの例を持ち出す。カンダタが地獄に落ちて行った後、僧侶はこう話を続けるのだ。「カンダタの心には個人としての自我のイリュージョンがまだあった。彼は、人間が向上して正義の尊い道に入ろうとする、まじめな願いの奇跡的な力を知らなかった。それは蜘蛛の糸のように細いけれども、数百万の人々を運ぶことができる。そしてその糸をよじのぼる人々が多ければ多いほど、その人々の努力は楽になる。しかしいったん人間の心に『これは私のものだ。正義の幸福をひとりじめにして、誰にも分けてやるまい』という考えが起こるや否や、糸は切れて、人はもとの個々別々の状態に落ちてしまう」。そしてこう結ぶ。利己主義とは呪いであり、真理は祝福である。地獄とはエゴイズムに外ならず、極楽は公正な生のことなのだ——と。

「蜘蛛の糸」は芥川が最初に書いた童話である。子供にはさすがに難しいと思ったのだろう。上記の部分をすっかりカットしてしまった。その結果、どうなったかといえば、「他人に対して慈悲の心を持たない者は罰せられる」という教訓の部分が残った。これは子供にも大人にも分かりやすい。だからこそ、今も残る日本近代文学史上の傑作になったとは言えないだろうか。

この教訓が、説教臭くて気に入らない、と反論した作家がいる。「日本沈没」などで知られるSF作家の小松左京である。小松は「カンダタが下に続く者に、糸を放せと言ったのは当然」と言う。なぜなら、これは自分の前に垂れてきた糸なのだから。当然、カンダタだけに権利がある。よほど腹に据えかねたのだろう。小松は同じ「蜘蛛の糸」という題名のショートショートを書いてしまった。いわばパロディー版である。

そこでは、カンダタは蜘蛛の糸を下ろされ、それを伝って上がり、ふと下を見ると、他の者も上がってくるのを見る。そこまでは同じだ。しかし、カンダタは彼らを追い落とすより、急いで伝い上がることを優先するの

である。これは当然だろう、と小松は書く。いつ切れるか分からない糸なのだから、立ち止まって下に向かってわめいていたら、それがきっかけでプツンと来るかもしれない。だから早く登っちゃおうと、急ぐほうが自然である。そしてカンダタはしっかり極楽に上がる。驚いたのはお釈迦様で、それに続く他の亡者たちを阻止しようとして失敗、代わりにお釈迦様のほうがバランスを崩して地獄に落ちてしまった。カンダタと亡者たちは全員、無事に極楽へ。

しばらくたつた後、カンダタが地獄をのぞくと、お釈迦様が血の池で苦しんでいる。カンダタは性格もすっかり温和になり、以前のことを思い出して、蜘蛛の糸を垂らす。お釈迦様がそれに気がついて登り始めるが、ふと下を見ると、地獄の鬼や閻魔様まで登ってくる。「お前たち、それは駄目だ」というと、蜘蛛の糸はプツンと切れ、お釈迦様は地獄へ真逆さまに落ちてしまった……。

この小松の言い分にも一理あるのではないかと思う。カンダタと亡者たちが、糸が切れることなく皆で極楽に登るあたり、まるでポール・ケーラス「因果の小车」の本質を見抜いていたかのようなのではないか。芥川が子供向けの教訓話にしてしまったものを、小松はもう一度、皆で努力して極楽で幸せになろう、という説話の原典に立ち返らせているように思う。少なくとも物語の前半部分までは。

ここでつげ義春の「リアリズムの宿」に話を戻せば、「あちらの宿屋に泊まっていれば」という主人公の後悔は、結局、自分の身の内にきざしたエゴイズムだということになるのではないか。エゴイズムを通せば、やがて糸は切れる。糸が切れれば皆の幸福への道が閉ざされる。お前さんのなすべきことは、宿屋の家族とともに幸せに向けて蜘蛛の糸を伝い上がることだろう？ 作者は主人公にそう戒めるために、あえて「蜘蛛の糸」の一節を持ってくるようにも読める。つげ漫画もなかなか深い。(こや)